

〔特別寄稿〕

藍野文庫について

檜木 純二*

今回、藍野学院紀要第 20 巻を記念号として発行するに際し、編集委員会から、学院に長く在籍する者として、何か記念号にふさわしいものを投稿して貰えないかとの依頼を受けた。藍野学院短期大学設立の準備から 20 数年間学院にお世話になり、その時々々の出来事を述べるだけでも、一つの学院史になるかもしれない。しかし、この藍野学院紀要の前史的なものでもあり、学院の機関誌として、また、自らも編集を行ってきた藍野文庫について語ることが学院史にもなるし、また紀要の記念号にはふさわしいと思われるので、藍野文庫の創刊号から第 17 号までを振り返ってみることにしました。

藍野文庫の発刊は、何と言っても故村上優廣先生のご尽力によるものです。先生は、小山藍野学院理事長や理事長のお兄さんの中学・高校時代の恩師に当たられる方で、昭和 58 年の 4 月、今までの看護のみの専門学校から、理学療法学科、作業療法学科、医療秘書・病院管理学科を開設し、藍野医療技術専門学校として、学院が大きく羽ばたこうとしている時に、教学担当の専務理事として赴任してこられました。先生のお姿は、パイプを燻らせながらも、どこか凜としたところがあり、議論は多くを語られませんが思考されたもので、万人が納得するものでした。

その先生が赴任されて間もなく、私をお呼びになって、前任校の甲南大学の理事時代にこのような本を編集していました、と一冊の雑誌のようなものをお出しになり、理事長にも賛同を得ているが、本学においても是非このような本を編集してみたいが手伝って貰えないかと依頼を受けました。私自身まだ本の編集など経験がなく、下働き程度なら邪魔にならず何とかお手

伝いが出来るのではと思いお引き受けしました（後に、自らが中心になって編集を担当するとは夢にも思っていなかったことです）。また、本学の性格上、医療関係者を抜きにしては語れませんので、看護の大家で、藍野看護専門学校の副校長も経験され、短大の設立準備委員でもありました早川先生にも編集に入って頂き、村上・早川両先生と私とで編集を担当することとなりました。

編集会議は常に村上先生がリードされ、早川先生が適切なアドバイスされて、纏まっていきました。その結果、藍野文庫は教職員の意思疎通をはかると共に、病院と学院との交流や紀要がまだ発刊されていなかったのが教員の研究発表の場としての性格も位置づけました。

そしてその年の 9 月に、創刊号の編集後記にも記述しています「教職員相互の意思疎通をはかり、藍野の理想と現実とを自由に確かめ合い、共に建学の難事をよじる杖とも致したく、それにふさわしい冊子を編むことを企画しました。」という文章と共に原稿募集を始めました。原稿内容は、研究発表、学院論、学院史、藍野教学の諸問題、情報紹介、随想・消息その他と制限を課さないもので、主旨に違わなければ結構です、としました。

数人の先生には編集より原稿を依頼しましたが、主旨に賛同して快く引き受けて頂き、原稿を頂戴することが出来ました。またそれ以外にも、多くの教職員から投稿を頂き、それらを村上先生が熟考されて、掲載順をお決めになり、誰もが納得する形で創刊号を発刊することが出来ました。

なお、「藍野文庫」の命名については、編集後記に

* 開設準備室

も記されていますが、公募を行ったが残念ながら応募がなく、編集が仮に使用してきた名称をそのまま使うこととしました。

創刊号の巻頭文には、単なる挨拶文ではなく、理事長が思考されていることを書いて頂くようお願いし、結果、藍野文庫の創刊号の巻頭にふさわしい「医療教育論」を論述して頂けることとなりました。そこには、医療教育の問題や医療関係者の育成、さらに医療のあるべき姿としての Sym-medical についても論述されています。

「医療教育論」は藍野文庫の第2号で、「続医療教育論」として医療教育における「学」と「実践」について論を展開されていますし、第3号には「医療教育論補遺(1)」で具体例を挙げて「医療の範囲」を論じられています。さらには、「医療教育論補遺(2)」で「医療教育の分類と各医療教育の概説」を、「医療教育論補遺(3)」で「医療教育の限界とその未来像について」及び「終章」を論じられる予定でしたが、残念ながら未完となってしまいました。しかしそこには、理事長の医療、医療関係者、医療教育に関する現在も変わらない思考が披瀝されており、少し文章は難解だが、一読されることをお勧めしたい。

また、理事長には各号ごと執筆を依頼し、ほとんどの号でそれに応えて頂き、多くの号で巻頭を飾ることが出来ました。以下、その題と号数のみを列举すると、「早川先生を頌す」(第4号)、「学院の将来像を展望する——医療教育論の補遺Ⅱとして——」(第6号)、「わが国高等教育における教養主義の終焉(1)」(第8号)、「藍野学院顛末記」(第9号)、「老人医療の光と影」(第10号)、「始元と区切り」(第11号)、「巻頭言——高等教育のゆくえ——」(第12号)、「EL Empecinado——本学所有の或る絵画のアナムネーゼ——」(第13号)、「アルコールと作家たち(訳)」(第14号)、「シャノン・ロード夫人の講演に寄せて」(第17号。これは大澤先生との共著)以上であり、お忙しいなか、藍野文庫のために非常にお骨折りを頂きました。

創刊号には、理事長の巻頭文以外に、その理念にふさわしく、これからという気概に溢れた多種多様な論考が掲載されている。

第2号は、別に特集を組むことなく、色々な教職員の方々から種々な原稿を頂戴しました。ただ特徴としては、これからは藍野文庫の一つの大きなテーマになっていきます実習問題が取り上げられていることです。また、短期大学の開設に併せましたので、初代

学長細川先生の「藍野短期大学の建学の精神実現に向けて」と巻末に「学校法人藍野学院沿革」を掲載致しました。それに「私の看護履歴」も、早川先生の看護の歴史と、学としての看護論が展開されており、興味深いものがあります。

第3号も、特集ではなく通常の号として、多くの教員の投稿を得ました。当時の藍野病院の院長の畑田先生にも原稿をお願いして、「医療と医学」という論考を得ることが出来ました。さらに第3号では、巻末に、短期大学開学記念講演の M・Mandrillo 博士(ペンシルバニア州立大学)「看護理論と看護過程を實踐に」とライダー・玲子先生(北里大学看護学部)「看護の中の愛と知性」を全文掲載しました。

藍野文庫第4号は、早川先生が第31回フローレンス・ナイチンゲール記章を授与されましたので、それを記念して巻頭に特集を組みました。看護の世界でナイチンゲール記章がどれだけ重みのあるものか万人の知るところですし、早川先生の藍野学院への功績を考えるなら、当然のことです。ただ残念なことは、発刊が迫っていたために、多くの人に依頼できず、ごく親しい人に限られたことです。さらに藍野文庫らしいのは、早川先生自らが、特集の巻頭に「看護における戦後40年の歩み」を執筆されています。そこには戦後40年の看護進歩と21世紀の看護論が展開されていて、先生の情熱が感じられるものです。第4号でさらに特記すべきは、大川副学長の「Theodor Fliedner von D. Anna Sticker」です。記述された時はフリートナーの紹介、カイザースベルトのディアコニッセの紹介、ナイチンゲールのカイザースベルト学園での学び等で、このような学園がドイツには存在しますとの紹介文でした。大川先生が亡くなられたためにこの紹介文は未完となりました。しかし、10数年後に、たまたま仲介の労をお執り頂く先生がいて、今まで学生の海外研修など受け入れたことのなかったこのカイザースベルト学園が、そしてナイチンゲール病院が、短期大学の学生海外研修の受け入れ先となったのは、何かの奇縁としか例えようがありません。

第5号は、通常の号として刊行され、特集など扱っていません。短期大学も初めての卒業生を送り、学院も一つの体を成した時期です。それ故に、研究・教育機関として、自らの研究等を世に問う必要があり、当然のこととして紀要の発刊が行われました。そこで、藍野学院紀要と藍野文庫との色分けが行われ、研究論文等は紀要に、それ以外は文庫に投稿されるようになってきました。ただ先生のなかには、紀要の投稿規

定が自らの学問分野のものと少し異なるため、自由に書ける文庫に論文を掲載される方もおられました。

第6号は、二つの柱で編集しました。一つは「藍野短大の現状を踏まえて将来の教育を考える」をテーマに、設立の準備段階から短大に関わってこられた熟年の先生たちと、短大に來られて1, 2年の先生方が別々に座談会を行い、日頃感じていることを述べて頂きました。

もう一つは、短大が当番校として「老人を支える医療・保健・福祉システムと看護」をテーマに開催しました、日本私立看護大学協会主催の第17回看護リフレッシャーコースにおける平岡宥峯先生（高野山真言宗大僧正、清風学園理事長）始め5名の先生方の講演とシンポジウム「老人を支える医療と看護」を掲載しました。

第7号は、課題であった「学院と病院」—— 実習を通じて —— をテーマに特集を編集しました。医療関係者養成施設としての学院と慢性的な看護師等の不足を抱えながらの実習施設としての病院との関係、常に古くて新しい問題です。学院としては優秀な医療関係者を育てるためには充実した実習が行える病院が必要ですし、一方、病院としては質量共にすぐれたスタッフが揃っていることが前提条件です。そこには様々な問題が存在し、何も、文庫が特集を組んだから解決できる問題ではないですが、相手の立場を少しでも理解、信頼することが必要ではないかと考え、特集を組みました。病院と学院の多くの方々より、投稿や座談をして頂き、所期の目的は達した感はありますが、何も解決したわけではなく、これからも検討されていかねばならない問題です。

第8号には特集を組んでいませんが、短大が第二期の中馬学長の時代に入り、理学療法、作業療法学科、医療秘書・病院管理学科が10年を過ぎ、専門学校看護学科（2年課程）が完成年度を迎え、学院が草創から充実へと向かう時ですので、山田先生に「藍野学院の歩み」を記述して頂きました。また、初めて学院が中国からの研修生を受け入れましたので、研修生の感想も含めて、その成果を記述してもらいました（現在も形は異なっていますが、中国からの研修生受け入れは存続しています）。それ以外にも理事長、学長、藍野病院院長など多くの方から原稿を頂戴しました。

第9号は、藍野医療技術専門学校開設10周年の特集を組みました。理事長は前述した「藍野学院顛末記」を、山田学校長は「理学療法学科、作業療法学科並びに医療秘書・病院管理学科の開設10周年を迎え

て」を記述され、各学科の教員が10年を振り返ってみての思い出や抱負を述べられています。医療秘書・病院管理学科では、卒業生を交えての座談会も催された。それに、それぞれの学科の卒業生からの学生時代の思い出や実際の現場での感想さらには学院に寄せる期待等を寄稿してもらいました。教職員のみでなく、卒業生にも投稿をお願いしたことは10周年の特集号としてふさわしかったと思われれます。そこでこの特集部分は別刷りされ、卒業生にも配布することとしました。

この特集だけで十分な量と質がありましたが、文庫としては通常の投稿もお願いし、掲載しましたので、非常に大部なものとなりました。

第10号は、とりわけて特集を組んでいません。しかし、専門学校の看護学科や短大の専攻科（地域看護学専攻）などが順調に滑り出しているの、その現況や教育のあり方を、それぞれの長に投稿してもらっています。また、10年続いた医療秘書・病院管理学科の名称を「医療福祉ビジネス学科」に変更するに当たり、その趣旨や抱負等を座談会形式で専任の先生方に述べて頂いた。

藍野学院も拡充されて10年以上も経過すると、学院で学び、その後実務を経験した人達が、再び学院に戻り、今度は教員として学生を指導する立場になる人達が出てきました。このことは学院として一つの成果であり、喜ばしいことと思えます。そこでこの10号の特色として、そのような先生方に学生時代の思い出や教員としての抱負などを投稿して頂きました。

第11号は、短期大学開設10周年の特集を組みました。理事長「始元と区切り」、中馬学長「短期大学開設10周年を迎えて」をはじめ、ほとんどの教職員に投稿して頂き、10年の歩みをそれぞれの立場で表現して頂きました。また卒業生にも声をかけ、各期から1名ずつ、現在の活躍している姿などを紹介してもらっています。特筆すべきは、大阪医科大学看護部長の勢川先生の「藍野学院短期大学10周年を迎えるに当たって—— 実習指導の変遷から ——」を始め、学生が看護実習でお世話になっている各病院の看護部長や病棟婦長に執筆して頂いたことです。医療関係者を養成する学院としては、実習病院を抜きには語れませんので、特集を刊行するに、実習病院の部長や婦長に投稿して頂けることは意義のあることと思われれます。

なお、11号は通常の投稿もお願いし、こちらの方も入職者の自己紹介やこの文庫を始められた村上先生の文章など多くを掲載し、第9号同様大部なものとな

りました。

第12号は、通常の号として刊行しています。この号では、現在藍野大学の学部長の矢野先生（東大教授）が本学で講演をされましたので、それをそのまま掲載させて頂きました。また、専門学校に介護福祉学科を設けましたので、学科長に就任されました栗谷先生に抱負などを述べて頂きました。また、藍野文庫の表紙・カットをお願いしている小坂画伯にも投稿して頂きました。それ以外にも、新しく入職された方、藍野を去られる先生などから多くの原稿を頂戴しました。

藍野学院は、前年に滋賀医療技術専門学校（2年課程の看護学科、4年制の理学療法学科・作業療法学科）を開設しましたので、第13号は滋賀医療技術専門学校の特集を組みました。開設年度で何かと忙しいなか、学校長、副学校長、各学科の主任を始め多くの教職員の方に投稿して頂き、開設の顛末やこれから滋賀医療技術専門学校へ掛ける期待や抱負などを語って頂きました。それらは新しく物事を始める気概に溢れたものです。13号も通常の号として、特集以外にも各学科の長や新入職者などにも投稿をお願いしました。

そしてこの13号には、まだ学院に看護の専門学校しか存在しなかった時に、その副学校長として活躍され、短期大学の教授として、これからの藍野を担っていかれると誰もが思っていた甲斐先生が、癌で急逝されましたので、その哀悼の意味を込めて、巻末に数編ですが先生のことを偲ぶこととしました。

第14号は、とりわけ特集は組んでいません。各学科の先生方がそれぞれの思いや学科で実施した特色或る教育などを紹介されています。巻頭のドナルド・W・グッドウィン「アルコールと作家たち」の理事長の一部訳は、後に完訳され一冊の本として出版されました。

第15号も特集はなく通常の号として発刊し、各学科の先生方の教育の工夫や自己紹介的なものが掲載されています。その中で、大澤先生の記述された「藍野加齢医学研究所の設立とその目指すもの」は、単なる藍野加齢医学研究所設立の紹介だけでなく、これからの藍野学院の目指す方向の一つとして考えられるものです。それとは逆に、その任を終えた医療福祉ビジネス学科の元、現学科長にその足跡を語って頂きました。また、短大の客員教授だった増田先生の「ナイチン

ゲールと19世紀ヨーロッパ」も興味のある文章です。

第16号、いつもの藍野文庫として発刊しており、専門学校や短大の先生方に教育の方法や自己紹介的なことを投稿して頂いています。

巻末に、この学院に大きな足跡を残され、この文庫の生みの親であり、編集をされてきた村上、早川両先生が相次いで亡くなられたので、この藍野文庫で追悼することがふさわしいであろうと思慮し、両先生と縁の深かった山田、長谷川、白石先生に両先生のことを偲んで頂きました。

第17号も通常の号です。巻頭に、第6回藍野学院国際会議の一環として行われたシャノン・M・ロード夫人の講演、「藍野学院の看護学生へのメッセージ：一人の患者からみた筋緊張性ジストロフィーについての展望」を掲載しました。また、藍野病院の院長として赴任された近藤先生にも、自己紹介をかねて「医学・看護教育のなかでおろそかになっている死生学」というテーマの論考を投稿して頂きました。それ以外は、いつものように学院の先生方に随筆や自己紹介的なものを投稿してもらっています。

以上第17号を以て、藍野文庫は休刊に入っています。

体裁が違うので文庫の方に論文を掲載された先生も居られますが、紀要も初期の頃と比べ、20号にもなると研究誌として立派に成長していますし、藍野フォーラムも発行されています。また、文庫の創刊号の編集後記に記載されている「共に建学の難事をよじる杖とも致したく」の時は十分過ぎたように思われます。そして何と言っても、細川初代短大大学長、大川副学長、本当に看護を愛された早川先生、藍野の生き字引だった山田先生、文庫が困った時洒脱な紀行文を多く寄稿して頂いた長谷川先生、そしてこの文庫を始められた村上先生などこの学院の礎を築かれた人達が次々と亡くなられました。何か一つの時代が終わったような気がして文庫を休刊しています。

しかし、「教職員相互の意思疎通をはかり、藍野の理想と現実とを自由に確かめ合い」という文庫発刊の理念は、紀要やフォーラムの目的とは違ったもので、大学が益々拡充し、学院が発展すればするほど、その必要性が増すように思われます。